

論文審査及び最終試験結果報告書

論文博士

地域社会研究科 地域社会専攻 地域文化研究講座

学籍番号

11GR102

氏名

石山 晃子

審査委員

主査

長谷川 成一

副査

佐々木 純一郎

副査

山田 巖子

(論文題目)

近世北奥地域における造船界の歴史的動向

(論文審査の要旨)

近世の造船史研究では、造船件数の数量的把握、造船に関わる人々の存在形態、造船が創出するネットワークの様相など、造船動向を示すきわめて重要な問題について、ほとんど等閑視されてきた。この問題を克服するため、本論文は、2部6章にわたって、近世北奥地域すなわち弘前、八戸、盛岡の各藩領域における造船界の具体的動向を明らかにし、その歴史的意義を論じたものである。

I部では、北奥地域における廻船建造と船大工の動向を検証した。北奥地域では、貞享期には年間最大15艘の大型廻船が建造されるなど、17C中葉から造船界の勃興がみとめられるという。その上で、有力諸藩の船大工は、集団やネットワークを組織し、近世期を通じて廻船建造の需要に応ずる基盤として存在し続けたとの主張は注目に値する。

II部では、北奥地域における漁船製作とアイヌの造船の問題を検討し、次の二点を明らかにしている。第一は、漁船の主力は、近世を通じて一般和人領民・アイヌとともに単材刳船で、その用材樹種の利用制限により、積載量の増大を実現する新たな船舶の構造が生み出されたとする。第二は、丸木船に淵源をもつ「ムタマ造り」は、用材や造船技術の市場が北奥全体に展開したことにより、同地域に特徴的な構造として定着したという。その特質は、津軽領内アイヌの場合、寛文期を一つの画期として、「縄綴船」に拘泥せず、海運に資する廻船を指向した点にあるとし、これは従来にない指摘といえよう。

以上の通り、本論文では、北奥地域の場合、領主権力、海商、船大工、一般和人領民、アイヌなどが、物資や情報、技術などさまざまな資源を相互に供給することにより、藩領域を越えた複合的な造船界を形成したことを明らかにした点が評価される。加えて、本論文で解明した造船界の地域的動向は、今後、近世の全国的な造船界のありかたを把握する上でも、大いに貢献するものといえよう。

(最終試験結果の要旨)

本論文は、造船史のみならず、造船に密接にかかわる海運、流通、商業、地域社会、技術などの総合的な視点からの研究であり、従来の近世史研究にも有益な示唆を与えるものと期待される。また近年、人・もの・情報で結ばれた近世社会にありかたに、近世史研究のさらなる深化を見いだそうとの傾向がみられるが、本論文は、造船史研究の立場から今後の近世史各分野の研究を進展させるのに大いに資する可能性を秘めていると考えられる。

以上のことから、審査委員全員一致して合格と判定した。